

いわかづみ

令和四年三月 第八八号

◇村の景観と歴史・人物(7)

◇民具が語る生活史(民具⑮マス)

◇方言一考(なつたら)とつくり

◇モノ言うもの(関谷学園資料⑤)

◇歴史館行事の報告・お知らせ



村の景観と歴史・人物(7)

開拓者たち

く大きな森の小さな家く

渡 辺 伸 栄

パイオニアプランツと呼ばれる植物があります。

溶岩や砂礫などの劣悪な土地にいち早く芽を出し、根を張り、繁茂し、やがては他の植物のための土壌を作る植物。高山に咲くコマクサもその一つ。可憐な花の見かけに寄らず、健気で逞しい開拓者です。

「大草原の小さな家」をテレビで観た人は多いでしょう。本で読んだ人もいると思います。19世紀末のアメリカ西部。主人公のインガルス一家は、森の木を伐り、家を建て、原野を開墾して畑をつくり、種を蒔き・・・、現代のアメリカ繁栄の基盤を築いた開拓者です。

開拓者の物語。遠い昔々の遠い国の物語と思っ

ていませんか。手元に「開拓の思い出」と題された小さな冊子があります。目次も前書きも後書きも無い簡素な冊子。大正から昭和にかけて、女川左岸の段丘原野を開拓した人々の手記です。

ドラマのような脚色は一切なし。鉛筆の芯を舐め舐め書いたのではと思うような訥々とした文章。それだけに、真心が胸を打ち、読み進むうちに涙が滲んできます。概略だけ紹介します。

小路二作さん(深沢)。大正11年、富山県から入植の父母と一緒に来村。当時小学2年生。昼なお薄暗い、根元1m程の大木の林の開墾だった。(あの「小さな家」の原題も、「大草原」ではなく「大きな森の小さな家」です。)木を伐り根を抜き地を均す。水田開発の作業量は、畑の比ではないでしょう。文末に誇らしく、「三〇余名の入植者は最大の苦勞と努力で一名の脱落者もなく成功した」と述べ、

開発会社の援助のお陰と感謝の言。

青塚キクエさん(深沢)。大正11年春、尋常小6年卒業後14歳で富山県から一家で入植。「鍬々手で耕す日々、私はまだ十五・六歳、手は豆だらけ。手痛む、あかぎれた足、モッコ担ぐ肩にタコが出来る。たまらなくつらい。痛い」「ここまで来るのに長い長い道のりだったのに、現在の深沢を見ると昔の苦しかった日々が一瞬の夢のように頭を駆けめぐる」「それが私の人生と考える開墾の日々、みなさんの努力で一三〇町歩の面積まで開墾したのです」と、大変な苦勞で開拓を成し遂げた誇り。とりわけ胸を打たれるのは、文中の一言「今日この深沢を語る時、このような開拓者がいたことだけでも思っ

て下さると幸いです。」秋元京子さん(上野)。20代の両親が山形県の酒田から、大正7、8年頃入植。ご自身はその後の誕生で、昭和30年代、払下げを受けた雑木林の開墾に従事。全て鍬の作業でとても苦勞したが、それを苦勞と思うと「初代の人達には申訳けない気がしました」と綴る。初代の開拓はこんなものではなかったろうと。菅原松吉さん(小和田)。大正11年、現酒田市浜中から父と二人、牛に夜具布団を積んで四日ばかりで歩いて来た。「日当取りは其の

日に金が入るが、冬の貯える米と言う物がないので米作りでなければならぬと言うので来た」と、入植目的を書く。開墾の傍ら、冬場には用水路の隧道工事等に従事した。「今では冬の貯える米、野菜も沢山になりました。是れも片岡様のお陰様と思います」「何時でも深沢の片岡碑の前を通る時には頭が下がります」と、感謝の弁。

菅原キヌさん(小和田)。祖父母が片岡の開墾と同時に(大正7年か)に富山から入植。祖父から聞いた思い出話を書く。初めは借家、その後「自分で丸太小屋を造り一家水入らずの生活」「人夫に支払う賃金受領に月に一回東京本社の方に出張」。大金なので袋式の胴巻きを肌身に付け、質素な身なりに草靴と簀(ミノ)姿で汽車に乗り込むと誰も近寄らなかった。社長に会って、この格好がスリ・カッパライ除けに一番だと大笑いした。片岡社長を神様のように慕っていたという。

冊子の最後を当時女川農協組合長を退職された大島三平さんが締めくくっています。この開拓地で生産される米の量は、女川農協管内の2割を占め、開拓地の世帯は50近くになる。このことからして、女川左岸段丘の開拓がいかにこの地域の発展に寄与したか、評価と感謝と誇りを忘れてはならない、と。

昨秋、朴坂山に登り女川流域を眺めてみました(写真)。4、5段に発達した見事な段丘です。そこは今、耕地整理が進み、村内一を誇る美田。黄金の波が輝いて、まさに開拓者たちの「血と汗と涙の結晶」。感慨深く見下ろせば、改めて、しみじみと新堀用水の存在を思います。

↓ 朴坂山からの女川流域 (左岸の見事な河岸段丘)



この黄金の田をなさしめている用水路。その開削に携わった謎の人物・安久鉄次郎。歴史館の館長・安久昭男さんの曾祖父。実は左岸段丘用水路の開削史は長く複雑です。その複雑な経緯を繋ぐ存在として、鉄次郎が浮上してきています。3ヶ月後の本紙発行まで、じっくりと調査して次回報告したいと思っています。乞ご期待といったところです。

民具が語る生活史

民具⑮ マス(梘)



松の内が過ぎると、店頭はあつという間に「受験」、「節分」、「バレンタインデー」特集に変わりました。節分は季節の分かれる日の前日を指すので、本来は年に4日あるはずですが、「節分といえは2月」となったのは、旧暦で立春を一年の始まりとしており、立春前の節分を特に重要な日と扱ったためです。関川村でも多くの家で節分が行われてきました。節分といえは豆まきですが、その際の掛け声からか、節分や豆まきを「福は内」と呼ぶ方も多いです。節分の日、マスに大豆や落花生を入れ、神棚にあげて祈ります。なぜか豆の入れ物はマスに決まっているようです。

そもそもマスは、物の体積を計量するための測定器です。尺貫法の単位である「合(ごう)」「升(しょう)」「斗(と)」を量るために利用されます。マスの基準が確立したのは、乙巳の変(大化の改新六四五年)で律令政府が出現し、全国統一の税制の租が実施されたことが要因です。この後、中世の混乱期には規格が不統一となり、領主が年貢を多く取ることを目的として、年貢を徴収する際に用いるマスと、支払いに用いるマスの二種類を用意することが行われていました。そこで織田信長は、当時京都で通用していた十合枡に奉行の印を押させて公定の枡と定め、豊臣政権もこれを継承しました。これを京都十合枡、略して京枡といいます。江戸幕府は江戸に江戸枡座を創立し、京枡を方4寸9分(約15cm)、深さ2寸7分と定めます。こちらが現在まで続く規格の基礎となっています。各地の領主、小売商は独自のマスを利用していましたが、不正な計量器の製作や使用は江戸幕府によって厳しく禁止され、違反者は罰せられることになりました。しかし、実際には偽のマスは広く用いられていた形跡があり、また藩ぐるみで不正を行っていたところもあるようです。結局、幕府の努力は実らず、江戸時代にはマスの全国統一は出来なかったといわれます。秤とは大きな違いです。

そのマスが節分に用いられるのは、穀物を計量するという用途や、マスが「増す」や「益す」に通じ、めでたいとされたことが理由のようです。

では、なぜ豆をまくのでしょうか。

古来より日本人は五穀(米、麦、粟(あわ)、稗(ひえ)、豆)に災いを祓う霊力があると信じていました。これを穀物信仰といいます。穀物由来の神様は多く存在し、神社では今も「散米」の行事が執り行われます。その五穀のひとつ、豆は、魔(ま)を滅(め)するに通じるとされます。陰陽五行説には季節の変わり目に邪気が生じるといふ考え方があり、良(う)丑寅(うしとら)北東の方角は鬼門です。鬼門から来る鬼は、丑(牛)の角を持ち、寅(虎)柄のパンツを履かせられています。曖昧模糊とした鬼が、形を持つようになり、節分は長い時間に様々な要素を吸収し、現在の形になりました。

さて、関川村の豆まきでは、「福は内」と「鬼は外」をどちらから何回ずつ唱えるか、家のどの部屋から豆をまくかなどのルールは各家で様々です。小皿に入った塩水を「つけ木」でまいて歩く露払いや、豆をまく人の後ろに弓張り提灯を持って「ごもつとも、ごもつとも」と言って歩く係がいたという家もあります。小和田の渡辺のマキ(一族)は渡

辺綱(わたなべのつな)にあやかり、「鬼は外」とは言わない。南赤谷の新野のマキは、葦名(あしな)氏に仕えていた先祖が会津から移住したとき、季節は師走。秋も過ぎ豆の収穫がなかったため豆まきが行えなかったことに由来し、先祖の苦勞を偲び今でも豆まきを行わない、など、一族の決まりも伝わります。節分に限らず、このように「わが家は○○しない・食べない・植えない」という家例」という事例は大変興味深いです。

話題は節分でしたが、関川村もすっかり春めいてきました。それぞれの春に向かって、まめまめしくいきましょう。(田村舞子)

参考文献 民具学会編一九九七「マス(枡)」

日本民具辞典「ぎょうせい出版、佐久間惇一他

編一九八六『関川郷の民俗』関川村教育委員会



方言一考・なつたら／とつくり

「なつたら」は下に打消しを伴う副詞で、「決して」とか「絶対に」と同義の方言だ。「なんぼ言うでもなつたら勉強しね」みたいな使い方をする。この「なつたら」、出自、語源が推測できない方言のひとつで、つまり、なつたら分らない。古語が変化、転訛して方言として残ったものが多い中、「なつたら」と同じ意味合

いで使われ、同じような音の言葉が古語にも現代語にも無い、という特殊な言葉だ。特殊といえば「とっくり」というのも実は変わった方言で、通常「とっくり」は「じっくり」とか「ゆっくり、十分に」のような意味合いで使われ「篤と（とくと）ご覧ください」の「篤と」が語源のようだが、関川村では「身動きせず、じっとしている」という意味だけに使われる。子供の頃騒がしくするとすぐ「とっくりしてれ」と怒られたものだ。

大雪だった今年も悪路悪天を押ししてK氏は隣町から道の駅に通った。動作に機敏なところはないが、ここにいたかと思えばあちらにいる。話好きなので、あちこちで立ち話をする風だが、中身が希薄なのですぐ飽きられ、結果的に「なつたらとっくりしていない」。毎週の古文書講座も常連だが、こちらは講義中とっくりしている。講義前と休憩時間はわんわんと世間話をしやがましいが、講義が始まった途端とっくりするのは、分を弁えているからであろう。万が一目立って質問でもされれば、なつたら答えられないと分かっているのである。（安久）

モノ言つもの・関谷学園資料⑤

戦後の二十一年七月に開校した学園ではあったが、そのわずか九ヶ月後には新制度が公布

されて、学園は基盤を失うことになる。その年の秋に学園を率いてきた佐藤仙一郎が校長を辞め、代わった吉成三雄も一年半後の二十四年の一月に校長を辞している。『関谷学園を偲ぶ』の著者で、この学園で教鞭を取った石井中氏はこの時期を関谷学園の終息と捉えていた。新しい教育の実験校はわずか三年余で、その成果も曖昧なまま終わりを迎える。終戦直後の教育界に咲いた徒花（あだばな）、あるいは花筏、と云えば語弊があるだろうが、活気と自由が溢れ、新しい教育を模索した学園は、そこで教え学んだ者たちに忘れ難い記憶を残して、泡沫のように消えたのである。

後年佐藤は学園に係る資料を後進の関小学校に寄贈し、現在は当館に保存している。学園の評価は4分3世紀位ではまだ定まらないのかもしれない。（安久）



佐藤の寄贈した資料の一部

歴史館行事の報告

○山と花のスライド解説会 1月16日(日)にスライド解説会を行いました。参加者十六名です。ご参加ありがとうございました。

○古文書解読講座 近祐治さん宅に伝わる道中記読了！2月からは、今から二三〇年ほど前の道中記を読み進めています。（4月からは第二、四週水曜日午後一時半です。）

お知らせ・今後の行事の予定

○村民ギャラリー「かな・漢字五人展」開催中！ 鈴木政信さんと村上市一先会の大滝寿美子さん、佐藤富喜子さん、鈴木美保子さん、土屋裕美子さんによる書道の作品展です。会期：3月19日(土)～5月8日(日)、どうぞご覧ください。

○谷文晁「鍾馗像」展示中！渡邊家宝物のひとつ、江戸時代の文人画家、谷文晁（たにぶんちょう）の描いた鍾馗（しやうき）像です。魔を祓う力があるという鍾馗様。コロナも退治してもらいましょ。ぜひご覧ください。



いわかがみ 第八八号

発行日 令和四年三月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300